

年報
平成22年度



東京医療保健大学東が丘看護学部
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY
Faculty of Nursing at Higashigaoka

東京医療保健大学 東が丘看護学部

平成22年度年報発刊に寄せて

tomorrow' s Nurses、ナースプラクティショナーとしての成長に期待を込めて

東京医療保健大学東が丘看護学部および看護学研究科（修士課程）は、21世紀の日本の医療保健を支える臨床に強い、役立つ看護職（tomorrow' s Nurses）の養成を目指して平成22年4月にスタートしました。修士課程では、クリティカル領域の診療看護師（ナースプラクティショナー）、特定看護師（仮称）の養成教育に挑戦しました。

スタートにあたって、教員としての看護学の発展・進化への関与、学生の教育、社会貢献などの活動の足跡をしっかりと継続的な記録として残し、公表していくことが、自らを律することに繋がると考え、「年報」を発行することにいたしました。年報の刊行は、一人ひとりの教員および組織としての大学の自己点検・評価の一つの方策でもあると思っております。

本学の教育研究の成果を実感できるようになるまでには、もう少し時間がかかりますが、夢と期待に胸を膨らませたエネルギッシュな若い学生達に囲まれた教員達の意欲と努力により、学年進行中であり限られた人数の教員しかいないにも拘らず、大学としての体制が順調に整いつつあると思っております。

看護系大学が、年々増加し、200校に達しようとしている中で、年報等を通して、みなさまから寄せられるご批判を真摯に受け止め、フィードバックさせながら、本学の特徴等を再確認し、本学のプレゼンスを明確にしていきたいと思っております。

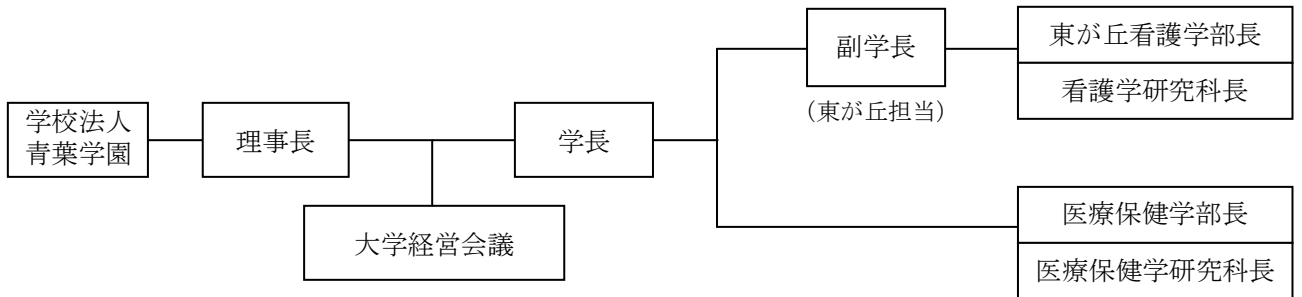
平成23年7月

学部長/研究科長 草間 朋子

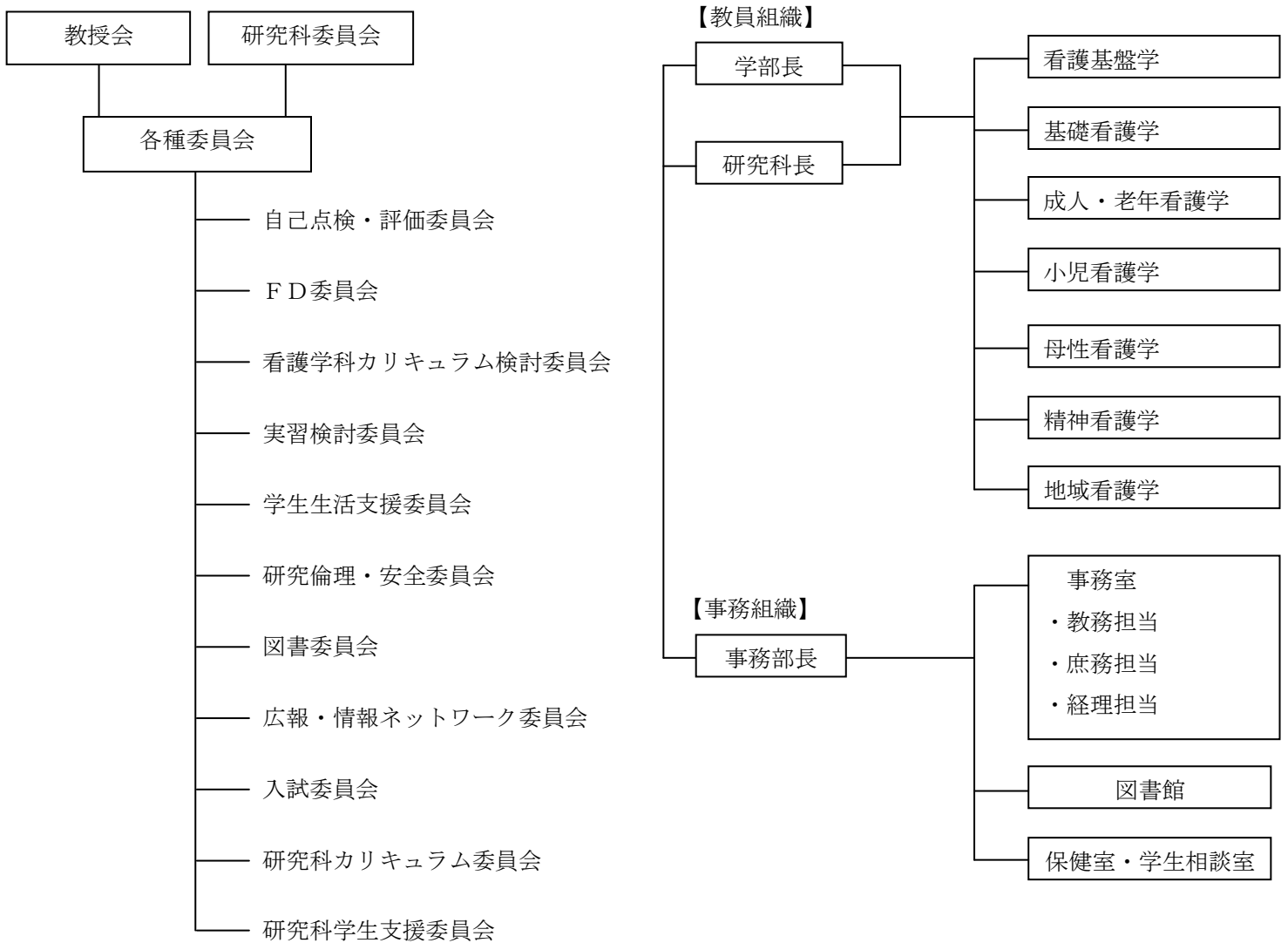
目次

- 1、 委員会/ワーキンググループの活動
- 2、 学内行事の概要
- 3、 教育活動
- 4、 業績
- 5、 教職員名簿

大学組織図



東が丘看護学部の運営組織



1、 委員会/ワーキンググループの活動

1-1 教授会

構成員

草間朋子（学部長）、教授および准教授、山西文子臨床教授

教授会の役割は、東が丘看護学部の教育上の重要事項、学生の入学や退学に関する事項、教育課程及び試験に関する事項、研究及び教育に関する事項、学生の在籍に関する事項等について、審議決定することである。本年度は11回の教授会を開催し、学部の入試の合否判定、進級判定、休学や退学について審議を行った。

1-2 看護学研究科委員会

構成員

草間朋子（研究科長）、教授および准教授、山西文子臨床教授

看護学研究科委員会の役割は、看護学研究科の教育上の重要事項、学生の入学や退学に関する事項、教育課程及び試験に関する事項、課程修了及び学位に関する事項、学生の在籍に関する事項等について、審議を行うことである。本年度は11回の看護学研究科委員会を開催し、大学院の入試の合否判定、進級判定、休学や退学について審議を行った。

1-3 自己点検・評価委員会

構成員

田中留伊（委員長）、今井秀樹（副委員長）、石川倫子、伊藤桂子、小宇田智子、中村裕美、田村聡明大学経営会議室長、荒木長事務局長、木原英三事務部長

本委員会は東が丘看護学部の自己点検・評価について、以下の活動を行った。

- 1) 学生による教員の授業評価アンケートを行った。次年度のシラバスや授業に反映できるように、科目を担当する教員には集計結果の返却を行った。また、看護学研究科の授業についても、授業評価アンケートの実施を行った。
- 2) ハラスメントに関する取り扱い細則を作成すると共に、ハラスメント発生時のフローチャートを作成し、実際に発生した際に機能することができるように配慮した。
- 3) 教職員の一年間の活動について振り替える目的で年報を作成した。また、ホームページ上に公開する予定である。

1-4 FD委員会

構成員

田中留伊（委員長）、今井秀樹（副委員長）、石川倫子、伊藤桂子、小宇田智子、中村裕美、田村聡明大学経営会議室長、荒木長事務局長、木原英三事務部長

本委員会は教職員の資質の維持向上を図るために、以下の活動を行った。

- 1) 開学して間もないため、全ての教職員を対象に、本学設立の経緯や特色について、草間学部長より「本学の目指す方向性や特色について」講演をして頂き、学生に対してより良い教育を提供するための共通理解を深めた。
- 2) 教職員を対象に、「科学研究費補助金申請講習会」を企画し、大分県立看護科学大学市瀬学部長を講師に招き、「科学研究費補助金申請について」講演をして頂いた。申請未経験者への情報提供と、競争外部資金申請に向けての全教員の意識向上を図った。
- 3) 特定看護師(仮称)・診療看護師を育成するための資質向上を目的に、看護学研究科公開講座エクランド源稚子先生による「NPとしての1日～この能力を獲得するまでの道のり～」講演参加を促し、NP教育に対する意識の向上を図った。
- 4) 当委員会の委員のべ4名がFD研修会や大学評価に関する研修会等に参加し、研修結果を学内教員と共有した。

1-5 看護学科カリキュラム検討委員会

構成員

松山友子（委員長）、清水洋子（副委員長）、山西文子、宮崎文子、古都昌子、石川倫子、田中留伊、小宇田智子、坂本祐子、村川陽子、渡邊淳子、佐藤潤、木原英三事務部長

本委員会は、東が丘看護学部の教育の資質向上に向けて、カリキュラムの充実及び教育環境の整備などに関する年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

1) カリキュラムの運用・編成について

開学年度において現行カリキュラムを適切に運用するために、カリキュラムに関連する疑問点や課題等について全教員から意見を聴取した。それらを踏まえ、現行カリキュラムの修正点の検討、4年間の時間割作成シミュレーションに基づく改善策の検討、非常勤講師担当科目の学内教員担当制による学外教員との連携強化、シラバスのフォーマット修正および記載方法の作成等を実施した。また、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に合わせた平成24年度以降の新カリキュラムの作成に向け、全領域から看護師教育の強化に向けた意見を募り、改正に向けた検討を継続中である。

2) 成績・進級等の学生の到達度評価について

1年次生全員の必修科目および選択科目の成績一覧表および退学予定者・休学予定者の個

別の成績一覧表を作成し、単位認定状況を確認した上で、進級の可否について教授会の承認を得た。進級要件については、次年度の検討課題としている。

3) 教育環境の整備（教材・教具）について

全教室現存の視聴覚教材を確認し、必要な教材の購入計画を立案・要望した。また、次年度に向け新実習室設置を検討・準備するとともに、各領域別に管理する教材（主として演習・実習用看護用品）のリストを作成し、管理方法を検討した。

4) 履修規程および学生便覧の検討

東が丘看護学部履修規程を検討・修正するとともに、学生便覧の内容についても一部修正した。

1-6 実習検討委員会

構成員

古都昌子（委員長）、伊藤桂子（副委員長）、穴沢小百合、村川陽子、坂本祐子、松沼瑠美子、渡邊淳子

本委員会は東が丘看護学部の教育の質的向上に向けて、看護学実習の企画・運営・実行上の以下の検討を行い、活動した。

1) 開学して間もないため、カリキュラム検討委員会での検討をふまえた実習科目について共通理解を図り、東が丘看護学部における実習の考え方を意見交換した。

2) 医療安全に関するワーキンググループでは、安全管理体制、実習における連絡体制、個人情報保護、受け持ち患者への説明と臨地実習同意書の取り交わしなどについて検討し、医療安全の確保、倫理規定の遵守につながる取り決め事項を作成した。

3) 実習における指導体制ワーキンググループでは、実習施設の受け入れ状況などをふまえて各領域からの意見を調整し、平成 23 年度、平成 24 年度実習計画を作成するとともに実習配置に伴う指導体制、実習施設との連携について意見交換した。

4) 上記、検討をふまえて 2011 年度臨地実習要項を改訂した。

1-7 学生生活支援委員会

構成員

穴沢小百合（委員長）、松沼瑠美子（副委員長）、田中留伊、伊藤桂子、喜多村健二学生支援センター長、花田準一教務部長、木原英三事務部長

本委員会は学生の生活全般に関する支援体制を整えるため、以下の活動を行った。

1) 健康管理について

健康管理は、保健師と連携し健康管理に関する情報を得て対応した。具体的には、健康診断の結果の検討、ワクチン接種の勧奨、インフルエンザ対策等である。感染症については、麻疹(否定された)、流行性角結膜炎、インフルエンザ等の発症があったものの、アウトブレイクには至らなかった。また、学生の主体的な健康管理を推進するため、健康診断、ワクチン接種の結果等を保存する「抗体価個人票および健康診断個人票」を作成するとともに、ワクチン接種から抗体価獲得までの流れを図式化し周知した。健康管理の体制としては、10月より健康管理医が委嘱され、健康問題について相談できる環境が整備された。

2) 学年担任・コンタクトグループについて

学年担任が決定した後、学年担任を中心にコンタクトグループのミーティングを定期的実施し、学生の状況など、情報共有の機会とした。また、学習継続が困難な状況にある学生については、学生生活支援委員長、学年担任、コンタクトグループの指導教員とで指導の方向性について検討しつつ対応した。

学生生活支援の充実を図るため、学年担任・コンタクトグループの編成やそれぞれの役割について検討し合意を得た。また、学習継続が困難な状況にある学生の報告ルートを整備し、学生の状況に応じた相談・支援を行う体制を強化した。さらに、緊急時の連絡・報告ルートの整備を行い、東日本大震災の発生時においても学生の安全確認等速やかに対応することができた。

3) 学友会活動の支援について

スポーツ大会、大学祭の全学行事に対応し、大学祭では、学科企画として看護体験実習の学習を紹介するポスターを掲示した。全学行事を通し、授業とは異なる学生の様子を把握する機会となった。東が丘看護学部学友会の活動としては同好会が発足し、それぞれの活動を開始した段階である。委員会としては執行部の相談に応じたり、必要に応じて保健医療学部の執行部との会議に出席したりと、学生の自主性を尊重しながら学友会の活動を支援する立場で活動した。

4) 学生便覧について

「Ⅲ. 学生生活」についてのページ全体を見直し、項目立ての妥当性・順序性・名称の検討、および内容が現状に即しているか等についても検討し修正した。また、ハラスメントや図書館利用についての項目を追加、健康管理の内容を追加し改訂した。

1-8 研究倫理・安全委員会

構成員

今井秀樹(委員長)、清水洋子、石川倫子、小宇田智子

活動初年度でもあるため「東が丘看護学部研究倫理・安全委員会規程」をまず作成し、研究科委員会の承認を頂いて6月17日より施行することとした。本年度はこの規定に基

つき 12 件の倫理審査申請を受け付け、学内委員 4 名および学外委員 2 名の委員会で審査し、9 件（うち 1 件は再申請）を承認し 3 件を不承認とした。研究倫理審査は原則として審査申請のあった翌月に委員会を開催（8 月は開催せず）して審査している。

1-9 図書委員会

構成員

金子あけみ（委員長）、坂本祐子、小宇田智子、中村裕美、飯嶋正敏図書館司書、官澤公美子図書館司書

本委員会は学生及び教職員の教育及び研究に資するため、以下の活動を行った。

- 1) 図書館本学図書館の図書、逐次刊行物、視聴覚資料及びその他必要な資料（以下「図書館資料」という。）の収集及び管理を効率的に行うため、新たに図書館システム及び検索システムを導入した。
- 2) 図書館資料を充実させるため、各領域の教員に対し、新規購入希望の図書、逐次刊行物、視聴覚資料等についてアンケートし、利用度の高い図書館資料の収集に努めた。
- 3) 視聴覚資料について専用のライブラリーを設置するとともに館内で閲覧できるよう視聴覚機器等を設置し、個別に利用できる環境を整えた。
- 4) 図書館資料の管理の一環として、除籍規準を作成し、蔵書整理に適用した。具体的には旧厚生労働省看護研修研究センターより移管された図書等を定期的に見直し、資料としての価値を失った資料や重複する資料で保存用以外の資料等を除籍の上廃棄した。
- 5) 図書館利用者が快適に利用できるよう、閲覧席にスタンドを配置した。

1-10 広報・情報ネットワーク委員会

構成員

清水洋子（委員長）、佐藤潤（副委員長）、穴沢小百合、伊藤桂子

広報・情報ネットワーク委員会の運営及び平成 22 年度委員会計画に基づき、入試広報部および関係する委員会等と連携して以下の活動を実施した。

1) 大学案内について

- (1) 平成 22 年度大学案内は、計画通り作成し、活用に努めた。

具体的に、内容を学部と大学院の合本にし、「学びの特色」コーナーは特に受験生の反応もよく、本学の独自性をアピールすることにつながった。

- (2) 次年度の課題として、今年度を踏襲し、本学部の特徴をより PR し一層の大学案内の

活用が図れるよう検討していく予定である。

2) オープンキャンパス・学校説明会・学校見学等について

(1) オープンキャンパスや学校説明会・見学会等の内容や開催日時の変更が度々生じたため、委員会の活動には柔軟的対応が求められたが、入試広報部と連携し教職員の協力を得て大きな問題もなく計画どおり実施した。

(2) 次年度の課題として、

①随時実施する学校説明会や学校見学において柔軟な対応がとれるよう、発表内容をビデオ録画で保存し活用する、講演内容のパワーポイント媒体を蓄積して各担当教員が活用できるようにする、など運営体制を整備する

②オープンキャンパスで使用する物品は、本学の物品で対応できるよう調整を図る

③高校からの依頼による学校説明会や見学等については、今年度の反省を踏まえて入試広報部と密に連携をとり、受け入れ校や実施内容の吟味、早期連絡がとれる体制が整うよう検討を重ねる

④担当教員全員に実施内容等を理解し徹底した運営ができるよう、オープンキャンパスの事前説明会の開催について検討する、予定である。

3) ホームページについて

(1) ホームページ開示時期の遅れや内容の一部に誤りがある等の問題がみられたが、入試広報部情報ネットワーク担当者 と協力し、年度中に本学部および大学院研究科のページおよび教員の紹介ページ、トピックスを開設した。

(2) ホームページによる広報活動として、エクランド源稚子先生の公開講座の案内をホームページに掲載し募集したところ、多くの参加者がみられ一定のアクセスがあったことを確認した。

(3) 次年度の課題として、

①平成 22 年度年報のアップをはじめ、他委員会と協力しながらホームページの充実に努める

②将来的に、ホームページのアクセス解析等を実施し、検索キーワードの充実に努めるなど、本学の特徴がより PR できるようにホームページの充実化に向けて検討する予定である。

4) その他

入試委員会と業務内容の検討を行い、次年度より入試説明会の担当者の調整等については本委員会で担当することになった。

1-11 入試委員会

構成員

構成員は非公開としている。

活動内容

本委員会は、平成22年度に実施した東が丘看護学部、大学院の入学試験に関するすべての事項について審議し、入学試験を統括した。特に、入学試験に関する広報活動、本学アドミッションポリシーの見直し（平成23年度大学入学者選抜実施要項（平成22年5月21日付）により、入学者受け入れ方針については求める学生像だけでなく高等学校で履修すべき科目や取得しておくことが望ましい資格等列挙する等「何をどの程度学んでほしいか」を出来る限り具体的に明示するという通知に基づき）を行い、学生募集要項の記載を改善した。また、一般前期入試においては、嘔気・嘔吐がある腸管感染症の全国的な流行に鑑み、試験室・要因の配置や体調不良者の取り扱いについて検討し、感染拡大および受験者の不利益を最小限にするための対策をとった。大学入試センター試験利用入試（後期日程）については、東日本大震災による交通事情、計画停電等を勘案し、特例として二次試験（面接）を実施せず、一次合格者を最終合格者とする等の対策を行った。

引き続き、今年度の反省を踏まえ、年度計画に沿って、入学試験のあり方等の検討を行っていく。

1-12 看護学研究科カリキュラム委員会

構成員

石川倫子（委員長）、宮崎文子（副委員長）、今井秀樹、清水洋子、松山友子、渡邊淳子、佐藤潤、山西文子、上原朝美係長

本委員会は看護学研究科の運営及び平成22年度委員会計画に基づき以下の活動を行った。

1) NP大学院教育

(1) NONPFが設定しているナースプラクティショナーに求められる能力および日本NP協議会で設定している実習単位に基づき、平成22年度カリキュラムを一部修正、平成23年度のカリキュラムの改善を図った。具体的には、下位能力の抽出を行い、7つの能力の定義を行い、教育目標を設定し、目標を到達するための具体的教育内容の抽出をし、科目を設定した。それに基づき平成22・23年度のシラバスを作成した。

(2) 診療看護師・特定看護師(仮称)の育成のためのカリキュラムへの共通理解を図るために大学教員においては調整会を開催し、国立病院機構 東京医療センター及び災害医療センター、東京病院の臨床教授には臨床教授会を開催した。またこれらの会議では担当科目に関する授業評価を行い、カリキュラムの検討も行った。

(3) 演習を行う実習室の必要性、配置等の検討を行い、実習室を設置した。また当大学院で修得をめざす医行為についての演習用の機材として、高機能シミュレータ等の購入計画を行い、整備した。

(4) 平成 23 年度から開催される実習内容及び方法について、検討を図った。また各実習施設への見学または研修に行った。

(5) 2 年間における試験の目的と方法を整理し、試験に関する内規の作成を行い、学生へのガイダンスを作成した。また実習前試験における筆記試験の出題内容および OSCE 試験の運営の検討を行った。

(6) 学生の到達状況等の把握を行い、課題がある学生への指導の検討をした。

(7) 大学院生数が今後 40 名になることも加味し、学生の学習支援等に関する検討を行う委員会の設置の検討をした。その結果、学習支援委員会を設置した。

(8) 大学院におけるカリキュラム等の質向上のために、臨床教授（医師）や NP について精通するメンバーの加入した WG の設置について検討した。しかし本委員会との検討事項の重複のため、設置はしないこととなった。

(9) 大学院生の「学生便覧」を次年度に向けて作成した。

(10) 「厚労省 特定看護師（仮称）調査施行事業」の申請を行った結果、実施課程となり、第 4 回チーム医療推進のための看護業務検討ワーキングでヒヤリングを受けた。また適宜調査報告を行った。

(11) 学校案内の大学院概要等を修正した。

2) 助産師大学院教育（下記に WG の活動を報告する）

(1) 平成 24 年度から開設する助産師コースのカリキュラムの審議・検討を行った。

3) 保健師大学院教育（下記に WG の活動を報告する）

(1) 保健師の大学院化について検討した。

1-12-1 大学院助産学コース設置に関するワーキンググループ

構成員

宮崎文子（責任者）、渡邊淳子、小嶋奈都子、早坂奈美、山西文子、田村聡明大学経営会議室長、加藤章子東が丘看護助産学校専任教員

教授会において本学看護学研究科に助産学コース設置を承認。5 月 12 日に大学院助産学コース WG を立ち上げ、WG メンバーを決定した。開催 WG は 30 回である。

主な活動概要は、助産コース立ち上げに関する検討計画案、東が丘看護助産学校助産学科との意見交換、学会・助産所・診療所・病院見学等の情報収集、育成したい助産師像の確

認と本学で養成する能力の検討、具体的な教育内容の検討、助産学コース設置の意義の検討、教育課程編成の考え方および特色の検討、養成定員数の検討、文部科学省高等教育局医学教育課事前相談2回、実習施設の検討および開拓、助産学コースカリキュラムの検討、科目および教授者の検討、申請計画書原案作成中である。

1-12-2 大学院保健学コース設置に関するワーキンググループ

構成員

清水洋子（責任者）、佐藤潤

本学看護学研究科の保健学コース設置については、社会の情勢やニーズを把握し、大学院保健学コース設置の必要性および大学院教育課程として育成したい保健師像や能力など、特色ある保健師の大学院化について検討中である。

1-13 看護学研究科学生支援委員会

構成員

宮崎文子（委員長）、石川倫子、田中留伊、村川陽子

本委員会は看護学研究科学生の学生生活を支援することを目的に、適宜委員会を開催した。また、看護学研究科学生便覧を作成し、支援体制の充実を図った。

2、 学内行事の概要

2-1 学年歴

【 前 期 】

4月

- 1 新入生ガイダンス
- 2 入学式
- 5 学内オリエンテーション
- 6・7 合宿オリエンテーション
- 8 健康診断
- 9 前期 Semester 授業開始

5月

6月

- 27 進学相談会

7月

- 9 スポーツ大会 (全学行事)
- 26～30 看護体験実習

8月

- 9 夏季休業開始

【 後 期 】

10月

- 3 看護学研究科入学試験
- 30 入試説明会

11月

- 6・7 大学祭 (全学行事)
- 13 指定校推薦入学試験
- 14 公募制推薦入学試験
- 30 看護学研究科公開講座

12月

- 1 創立記念日
- 13～17 看護体験展開実習
- 24 冬季休業開始

1月

- 7 冬季休業終了

2月

- 4 一般前期試験
- 12 一般前期二次試験
- 18 一般中期試験
- 26 一般中期二次試験
- 21～25 臨床判断実習

2-2 オープンキャンパス

8月8日(日)下記のプログラムにより国立病院機構キャンパスにおいてオープンキャンパスが実施され、受験生、父母等を併せ、438名の参加があった。

第1会場 国立病院機構本部講堂

全体講演会 9:30~14:40 2回に分けて実施

【内容】 ①大学の理念と教育方針 ②カリキュラム説明 ③入試概要説明 ④学生による実習体験談

個別相談会 ①入試相談 ②教育内容、学生生活 ③看護学研究科に関すること
④行事、奨学金、学生寮等

第2会場 本館講堂、学生ホール

【体験コーナー①】母性看護学体験：新生児のお世話体験、妊婦体験を行い、分娩のメカニズムなどを学ぶ

【体験コーナー②】臨床基礎技術学体験：障害を持った患者の車椅子移乗と移送体験

【在学生と話そうコーナー】在学生と自由に話し、交流を図る

第3会場 実習病院見学：東京医療センター

病院の説明の後、1グループ15名程度で5グループ、1回30分程度で、5回に分けて、東京医療センターの看護職スタッフの案内により、病院見学を実施した。

2-3 公開講座

11月30日、看護学研究科主催による公開講座が国立病院機構との共催により実施され、全国から、看護師をはじめ、医療関係者、大学教員等167名が参加した。

この公開講座は、大学院看護学研究科の非常勤講師として米国からエクランド源稚子先生を招へいた機会を活用して、特別講演「NPとしての1日~この能力を獲得するまでの道のり~」を広く一般に公開し、NPに対する理解を深めてもらうことを目的として実施したものである。

2-4 学友会活動

1) スポーツ大会

学友会の全学行事である、スポーツ大会が7月9日(金)に、足立区の東京武道館で開催され、東が丘看護学部からは55名が参加し、競技に参加したり大会役員として他学部の学生(教職員)と一緒に活動を行った。

2) 大学祭(医愛祭)

全学行事である大学祭が11月6日(土)・7日(日)に世田谷キャンパスで開催された。東が丘看護学部では、3つのサークルが、模擬店「チュロス販売」「ピザ・ドリンク販売」

「駄菓子販売」を出店、また、音楽サークル「D a c a p o」によるアンサンブルコンサートが行われた。さらに、学科別企画として、東が丘看護学部紹介の部屋を設け、パネル展示や教員による学部のPR活動を行った。

3、 教育活動

3-1 平成23年度入学者選抜状況

概 要

看護学部看護学科及び大学院看護学究科の入学者選抜の概略は次表のとおりである。

1. 看護学部看護学科

入学者選抜試験の概略

試験区分	試験日	定員 ^①		志願者数 ^②		受験者数 ^③		競争倍率 ^{④/①}		合格者数		入学予定者数 (入学者数)	
		()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
指定校推薦入試	11月13日(土)	(30)	15	(13)	13	(13)	13	(0.4)	0.9	(13)	13	(13)	13
公募制推薦入試	11月14日(日)	(10)	10	(50)	24	(49)	24	(4.9)	2.4	(27)	16	(27)	16
センター試験利用入試 前期	11月15日(土)・ 16日(日)	(-)	15	(-)	297	(-)	296	(-)	19.7	(-)	92	(-)	43
一般入試 前期	2月4日(金)	(45)	45	(266)	465	(256)	453	(5.7)	10.1	(92)	101	(44)	51
一般入試 中期	2月18日(金)	(15)	10	(74)	208	(69)	197	(4.6)	19.7	(22)	10	(20)	8
センター試験利用入試 後期	11月15日(土)・ 16日(日)	(-)	5	(-)	17	(-)	17	(-)	3.4	(-)	5	(-)	3
合計		(100)	100	(403)	1,024	(387)	1,000	(3.9)	10.0	(154)	237	(104)	134

○ 推薦入試

1) 指定校推薦入試

(1) 対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成23年3月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が3.5以上の者

(2) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜した

2) 公募制推薦入試

(1) 対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成23年3月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が3.5以上の者

1) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜した

○ 一般選抜

1) 一般入学試験 前期・中期

(1) 一次試験科目

必須科目 英語 I・II (100点)

選択科目 国語総合【現代文のみ】、数学 I・数学Aから1科目選択

生物 I、化学 I から1科目選択

(2) 二次試験 (面接)

一次試験合格者に対して、二次試験として面接を実施

2) センター試験利用入学試験 前期・後期

(1) 一次試験

必須科目 英語【リスニングを含む】(150点)

選択科目 国語【近代以降の文章】、数学AからI科目利用。【2科目以上受験している場合は高得点のものを利用(100点) 生物 I、化学 I から1科目利用【2科目以上受験している場合は高得点のものを利用(100点)】

(2) 二次試験

一次合格者に対して、二次試験(面接)を実施

2. 大学院看護学研究科

入学者選抜試験の概略

(名)

試験区分	試験日	定員 ^①	志願者数 ^②	受験者数 ^③	競争倍率 ^④ ③/①	合格者数	入学予定者数 (入学者数)
第1次募集 推薦入学試験	10月3日(日)	20	(12) 16	(12) 16	(-) -	(12) 15	(12) 15
第1次募集 一般入学試験	10月3日(日)		(6) 12	(6) 12	(-) -	(6) 7	(6) 6
第2次募集 推薦入学試験	-	若干名	(2) -	(2) -	(-) -	(2) -	(2) -
第2次募集 一般入学試験	-		(1) -	(1) -	(-) -	(1) -	(1) -
合計		20	(21) 28	(21) 28	(1.1) 1.4	(21) 22	(21) 21

○ 選抜方法

筆記試験、面接及び出願種類を総合して判定

1) 筆記試験

看護学に関する総合的な基礎知識を出題する。

必修問題 2 問、選択問題 3 問から 1 問を選択。試験時間 1 2 0 分

2) 面接試験

一人 1 5 分程度

3-2 科目の教育活動 (学部)

【基礎看護学領域】

A 基礎看護学

教育方針

基礎看護学では、専門職としての看護と看護学とは何かを中核に据えて、看護学についての概括的な知識と考え方を理解させるとともに、看護の役割の重要性を認識できるように教授する。併せて、看護実践に必要な諸理論を学ぶことを通じて、自らの看護に対する姿勢を考えさせる機会としている。具体的な科目は、看護学概論、看護倫理、看護教育、フィジカルアセスメント、臨床判断論、基礎看護技術、基礎看護学実習等である。これらの科目が有機的に統合された状態で学生に定着することを目指し、臨床看護学の基礎的理解と展望を導くことをねらいとしている。

科目の教育活動

1) 看護学概論

1 年次前期

宮崎文子

看護学の導入として、看護とは何かを多角的に学び、看護を取り巻く主要概念 (環境・人間・看護・健康)、看護の歴史的変遷、看護の対象としての個人および家族を理解し、併せて、看護理論 (モデル) の意義を学び看護における理論活用のあり方が理解できるよう、自らの看護に対する興味・関心が持てるような教材の工夫に配慮した。

講義内容は、看護の概念、看護を考える 4 つの柱 (人間・環境・看護・健康の関連) ナイチンゲールの哲学、看護モデル (ヘンダーソン・オレム・ロイ・ペプロウ)、看護の歴史と看護学の確立、看護教育制度、看護と法律、保健医療システムと看護、看護の機能と業務、看護活動、病院看護管理等である。開学初年度で講義中心であったが、出席状況も 90% 以上であり大変興味を持って講義に臨んでいた。ノートを取る学生が少ないように見受けられた。今後は積極的な学生参加が可能となるように講義法の検討が課題である。

2) 看護倫理

1 年次後期

栗屋典子

看護の専門性と倫理について考え、看護者の倫理綱領をひも解きながら、看護現場で生じやすい倫理上の問題、価値葛藤が生じるときの問題等について、他者の考えや意見を参考に熟考する。倫理が問われる場面での自らの考えを深めながら、専門職として看護職が身につけておきたい倫理観を養うことを授業目標として、倫理に関する基礎的知識、看護の専門性と倫理性、看護者の倫理綱領等について教授した。

講義の時期が 1 年次後期後半であり、看護体験が乏しい時期であることから、看護場面を想起しやすいような事例を多く示しながら講義を進めた。今後、本格的に実習が始まった時点で配布した資料に再度目を通し、看護現場における倫理上の問題等に気づき、対処してゆけることを期待している。

3) 看護体験実習

1 年次前期

穴沢小百合、宮崎文子、松山友子、古都昌子、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子、早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、病棟、手術室、外来の 18 看護単位に学生を配置した。医療現場の看護・人間・健康・環境について、実習施設での見学および指導者からの説明を通して学習をすすめ、カンファレンスや実習記録・レポートの記述、等を通して学習した内容を整理した。実習最終日には「人間を身体的・精神的・社会的側面の統合体として理解する重要性」「看護職の役割と重要性」をテーマに学習した内容について発表して意見交換をすると共に、実習施設の看護職副院長、看護部長はじめ実習指導者から助言を得ることでさらに理解を深めた。実習指導を通し、日々のカンファレンス展開が目標到達に効果的かつ重要であることが明確になったため、今後カンファレンスの充実に向け検討したい。また、学生は本実習が初めての臨地実習であり、専門的態度としての身だしなみや挨拶、時間厳守、健康管理といった基本的な事項を意識的に整えることが不慣れな状況にある。そのため、オリエンテーションおよび実習期間を通して、それらを意識的に指導した。この点については今後も継続して指導する必要がある。

4) 看護体験展開実習

1 年次前期

穴沢小百合、宮崎文子、松山友子、古都昌子、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子、早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、15 病棟に学生を配置した。実習施設における看護実践の見学および指導者からの説明を通し、身体的・心理的・社会的状態に関する情報収集の方法、日常生活上の問題を特定し援助計画を立案・実施する過程について学習し、カンファレンスや実習記録・レポートの記述、等を通して整理した。情報収集の方法では、フィジカルアセスメントの授業で作成した「看護理論に基づいた系統的観察項目」を情報の整理に活用したことで、「系統的観察をする意義と重要性が明確になった」との意見があり、講義の学習内容の深化がみられた。また、患者の反応を観察する方法としては、事前に担当教員や実習指導者から指導を受け、バイタルサインの観察を実践した。これにより、学生は患者の反応を確かめながら看護技術を提供することの難しさを実感した一方で、達成感・充実感を得ていた。バイタルサインの観察の実践は看護師を目指す学生の学習の動機付けとしても重要な機会であった。このため今後は、一人ひとりの学生に可能な限りきめ細かな指導ができるように、さらに指導体制の充実を図りたい。

B 臨床看護技術学

教育方針

本領域においては、基礎看護学領域における看護や人間の考え方を踏まえたうえで、看護実践能力の基盤となる看護技術力や判断力、問題解決力を養うことを目指し、講義・演習・実習を展開する。具体的には、人間の生活の特徴を理解し、統合体としての人間に関する情報を的確に収集する力、その情報を看護学的な視点から分析・判断し看護上の問題や課題を導く力、一つひとつの看護技術のもつ科学性や安全性、安楽性や倫理性を追求しつつ問題や課題の解決に向け対象の個別性に応じた看護技術を提供する力、常に自らの看護技術やその提供過程を評価し、「何故そうするのか」「何が最善か」を自問自答していける力を、それぞれの科目の学習内容を有機的に関連付けながら教授-学習できるようにする。また、看護学の学習の導入となる領域として、学生が看護の奥深さや楽しさに触れると同時に、専門的な学習への動機づけとなるような授業展開を探求していきたい。

科目の教育活動

1) フィジカルアセスメント

1 年次通年

穴沢小百合、松山友子、古都昌子、吉満祥子、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子、早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

対象の健康問題を把握するために必要な看護技術であるフィジカルアセスメントについて、観察の基礎知識、バイタルサインの観察、呼吸系・循環器系・消化器系・運動器系・脳神経系の観察等について、前提科目の事前学習を促しつつ教授した。フィジカルアセスメントの看護技術を提供するプロセスを提示し、患者への説明と同意、患者の準備・環境

調整、イグザミネーション実施、その後のアセスメントと、看護の一連の過程が学習できるようにした。また、イグザミネーション実施時には患者への配慮や安全の確保に努めることを強調して指導した。また、人間の健康を系統的かつ包括的にとらえる方法として、看護理論を活用した系統的観察について示し、学生自身で具体的な観察項目を抽出した。さらに、観察項目の抽出過程を振り返り、看護理論を活用し系統的観察を行うことの有効性および限界について理解を深めた。フィジカルアセスメント技術の一つ、バイタルサイン観察では学生が技術習得に時間を要する結果であった。今後、確実な技術習得を促す指導方法を工夫すると共に、授業時間数の確保、実技試験の前期中の実施等で対応したい。

2) 臨床判断論

1 年次後期

吉満祥子、松山友子、穴沢小百合、高野律子、竹前良美、加藤理枝子、牧栄理

生活過程を整えるための援助場面における臨床判断の視点とそれに基づく援助方法を学ぶことを目的に、身体の清潔の援助を例に授業を展開した。講義では、V.ヘンダーソンの理論を活用し、ニードの充足状況の判断の視点や、援助を実施するために必要な基礎知識を中心にパワーポイント・VTR等を使用して行った。また、清潔の援助が必要な患者の事例を提示し、援助の具体的方法の立案を事前課題とすることで、実際の援助場面における思考のプロセスを理解できるように計画した。演習においては、自らが立案した具体的方法に沿って援助を実施し、患者の反応を基によかった点や改善点を評価した。この講義・演習を通し学生は、患者の体力・意思力・知識の3側面から個別性や援助範囲を考え、原理・原則に基づき、安全・安楽・倫理的配慮を考慮した具体的計画を立案することの重要性を学ぶとともに、これらを踏まえて計画を立案することや患者役学生の反応を観察しながら実施・評価することの難しさを実感していた。今後は、演習後にグループ学習を取り入れるなど、援助場面における臨床判断のプロセスや具体的方法をより明確に理解できるように方法を検討したい。

3) 看護実践技術論

1 年次前期

松山友子、穴沢小百合、古都昌子、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子、早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

看護技術の基本的な成り立ち及び人間の生活の特徴に関する理解に基づき、様々な状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶことを目的として授業を展開した。看護技術の基本的な成り立ちについては、人間の生活過程の特徴や基本的ニードを理解し、安全と倫理に配慮しつつ科学的根拠に基づく看護技術を提供する意義や看護職が

専門的な視点から人間の生活過程を整える意義を学習した。また、看護技術に関する基本的な考え方を踏まえ、看護場面に共通する技術（コミュニケーション、感染予防、ボディメカニクス）や人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境調整、活動休息・衣生活・食事・清潔・排泄を援助する技術）について、講義やグループワークを通して学習した。事前課題として、学生自身が患者役として生活を体験する課題を設定したことにより、対象の状況や援助の意義を実感として理解でき授業の導入に有効であった。しかし、今年度の時間割編成では領域内 3 科目の講義・演習が入り混じっての進行となり学生の混乱も少なくなかったため、次年度は学習効果を考慮し改善を試みたい。

4) 看護実践技術展開論 I

1 年次前期

古都昌子、松山友子、穴沢小百合、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子 早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

生活行動を営む人間の一人ひとりの状況や健康状態を適切に判断し、それに応じた援助方法の決定や実践の展開ができるための基礎的な能力を養うことを目的に授業を展開した。看護実践技術論を踏まえ、人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境の調整技術、活動休息・衣生活・食事・清潔・排泄を援助する技術等）の習得に向け、看護技術演習を実施した。学習内容としては、各々の看護技術の典型事例の援助過程を通し技術の原理・原則を理解して実施することに加え、専門的視点による観察、安全・安楽への配慮、患者への倫理的な配慮を具体的な行動レベルで理解すること、自己の技術提供過程を評価することとした。演習方法は、52 名ずつを 1 クラスとし、それぞれ患者役・看護師役・観察者役を交替で実施して学びを深めた。また、学生の技術習得に向け、自作の看護技術評価表の提示、デモンストレーションや個人指導、グループ検討等内容に応じた多様な教授方略により対応した。しかし、学生の看護技術の習得状況については、授業後の個人練習の成果を反映した個人差が見受けられたため、次年度は授業後の自己学習の強化に向けた方策を検討したい。

5) 看護実践技術展開論 II

1 年次後期

穴沢小百合、松山友子、吉満祥子、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子、早坂奈美、雛田雅代

医療現場に必須の看護技術であり、より高い倫理性と正確性、安全性が求められる診療の補助技術について、無菌操作、導尿、与薬(皮下注射・点滴静脈注射を含む)、静脈血採血の技術を中心に教授した。これらの技術は手元の細かい基本動作によって構成されるこ

とが特徴の一つであるため、看護技術を構成する行動を言語化した看護技術評価表とそれに対応した自作のビデオを教材として技術習得を促した。また、演習を通して学生が体験したヒヤリハットの場面や倫理的葛藤が発生した場面を例に、安全と倫理に配慮することの重要性と困難さについて考察した。さらに、治療を受ける患者の生活援助について、点滴静脈注射を受ける患者の看護を例に検討した。点滴を受けながら生活することの不便さや危険について、点滴スタンドを押しながら歩行する際の滴下状態、歩行時の体験等を元に検討したが十分とは言えなかった。治療を受ける患者の看護は、治療が生活に及ぼす影響を考え、生活援助と合わせて診療の補助技術を提供することが重要である。今後、治療を受ける患者の生活援助について学生が援助方法を工夫できる授業展開を検討したい。

6) 臨床判断実習

1 年次後期

吉満祥子、松山友子、穴沢小百合、高野律子、竹前良美、今井真喜、加藤理枝子 早坂奈美、雛田雅代、牧栄理

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、15 病棟に学生を配置した。受け持ち患者に合った援助を実践することを通し、日常生活援助に対する知識・技術・態度を学習することを目的とした。本実習において、学生が初めて患者を受け持つことを考慮し、看護体験展開実習と同様の病棟・同じ実習指導者の下で 5 日間の実習を行った。学生は、受け持ち患者の個別性に合った援助計画を立案・実施することの難しさを体感すると共に、その必要性や重要性を学習し、実習終了時には看護師が日常生活援助を行う意義を自らの言葉で述べ、今までの学習を深化させていた。学生にとって一年間の集大成として、また、今後の看護学の学習に対する意欲の喚起につながる実習となったと考えている。

本実習は、同時期に約 100 名の学生が日常生活援助を中心とした臨床実習を行うことから、事前に実習施設と実習環境や指導体制に関する検討を重ねてきたが、次年度も継続的に連携を図り、実習指導を充実させていきたいと考えている。

C 医療臨床実践看護学 I

科目の教育活動

1) 看護過程と看護方法論

1 年次後期

松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、高野律子、竹前良美

看護過程は、看護の対象となる人々の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法である。本授業は、「看護過程の概要とその活用の意義」、「看護過程の展開方法」、「看護記録」、「質の高い看護の提供に向けた看護過程の活用の現状と課題」で構成した。

具体的な看護過程の展開方法については、看護過程の5段階を、さらに11のステップに分け、ステップごとに「基本的な知識の講義」→「事例展開の課題（個人課題）」→「課題のサンプル例の提示と解説」というパターンで講義・演習を展開した。学生からは、課題を考えるのは大変であったが、事例展開を自分で実施しながらステップを進めたので理解ができたとの反応であった。冊子にまとめた講義ノートは学習に役立ったとの意見が多かったが、事例については情報不足や分かりにくいとの意見も聞かれたため、次年度に向け改善したい。さらに、個人課題を実施後のグループによる意見交換についても参考になったとの意見が多かったため、次年度も進行の段階に応じてグループの取り入れを検討したい。

【成人・老年看護学領域】

D 医療臨床実践看護学Ⅱ

教育方針

教育理念である看護実践能力の育成に向けて状況別看護・発達別看護は中核となる学習である。あらゆる状況にある対象（患者・家族）を統合的に理解し、健康段階と個人の生活に応じた看護実践の基礎的能力を育成できるようにカリキュラムを実施していく。

看護実践能力の育成に向けて、看護の対象となる人間・社会や健康についての豊かな知識を用い、健康を取り巻く社会の現状と対象の状況の関連を幅広く理解する。その上で主に成人期・老年期を生きる対象の発達課題や健康課題に応じた支援を考え、計画・実践できるように学習を進める。

授業や演習を通じて、全人的に対象理解を深め、知識を統合して根拠ある実践ができるようにする。事例を用いたシミュレーションにより、臨床の現実や看護場面の実際を想起し、状況に応じた実践に向けて、主体的に学習に取り組めるように教授したい。

科目の教育活動

1) 成長発達と看護

1年次後期

古都昌子

小児領域の教員とのオムニバスで運営し、成人期・老年期の発達の特徴、発達課題について講義した。自らも成人期を生き、生涯発達しながら生き抜く生活者であると理解できるように投げかけた。事前アンケートで学生に成人であることの意味や老年への意識を問いかけ、クラスのアンケート結果を講義内で紹介することで、価値観の多様性や偏りなどを認識できるようにした。

現状について最新の国民衛生の動向や厚生白書によるデータ提示と必要に応じて歴史的推移をたどり、社会の現状を把握できるように講義した。ビデオ教材や新聞記事などによ

り、興味関心を高め、各発達課題を生きる人間の状況を現実の姿から理解できるようにし、毎回、講義内で学習した国家試験問題と振り返り用紙の配布により、振り返りの中で学びが確認できるように工夫した。

次年度も DVD 教材や、具体的事例などを用いて理解が深まるように努めるとともに学生の思考をゆさぶる発問を増やし、意見を引き出しながら教授できるように工夫したい。

2) 成長発達各期の特徴と看護実践

1 年次後期

古都昌子

小児領域の教員とのオムニバスで運営し、成人期・老年期に起こる健康課題とその支援についてオリジナルのスライドやワークシートを用いて、講義した。健康課題につながる自らの生活状況について講義前アンケートにて生活習慣と健康課題について調査し、講義内でそのデータを用いて学習した。DVD 教材によって、生活習慣病を発症して生きる成人期の対象の状況の理解を促進できるように工夫した。

毎回、講義内で学習した内容を盛り込んだ国家試験問題を配布し、学習の定着を図るとともに、講義後に振り返り用紙を配布し、意見・質問を受けながら次回講義の冒頭では、質問に答え、反映させた。次年度はさらに学生のグループワークなどを取り入れ、参加型の学習に取り組むとともに、より興味関心を引き出せるような教材の選定や教育方法を工夫したい。

【小児看護学領域】

教育方針

成育看護学（小児）の講義と演習をとおして、成長発達過程にある小児の保健と小児看護の役割を理解することをねらいとしている。

そのため、生活環境が子どもの成長発達に及ぼす影響や各発達段階における子どもの健康問題、成長発達評価、発達理論について学び、子どもの健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を含めた小児看護の特殊性について理解を深め、次の段階の小児看護の看護過程の展開と必要な援助技術を学ぶことがねらいである。

成育看護学（小児）では、小児保健および小児看護に関する知識を学んだ学生に対して、あらゆる健康状態にある子どもへの関わりの機会を持ち、子どもの成長発達の実際と健康を維持増進する関わりを理解し、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができることを期待して教育を行っている。今後は学習段階に応じて、学生が健康・不健康に関わらず子どもと家族への援助者としての態度を身につけ、健全な子ども観を構築できるよう工夫・配慮したい。

科目の教育活動

1) 成長発達と看護

1 年次後期

村川陽子

人間にとっての成長発達の考え方を幅広くとらえ、ライフサイクルにおいて成長発達を促進あるいは阻害する要因と成長発達各期の人間の発達特性、健康特性を学ぶことをねらいとしている。そのため、乳児期から老年期までの人間の成長発達および、各発達段階における人間の健康問題や成長発達評価、発達理論の理解、それに必要な看護を教授した。具体的な内容は次のとおりである。1) 人間と成長発達、①人間とは、②人間と成長発達、③成長発達に影響を及ぼす因子、④人間のライフサイクルについて、2) 発達理論について、3) ライフサイクルにおける人間の成長発達、乳児期から老年期までの心と体の特徴と各期に生じやすい健康問題と看護についてである。乳児期から思春期までは小児担当教員、成人期から老年期にかけては、成人・老年担当教員が担当した。学生には、自分自身や家族を想起してもらい、発達課題や健康問題など考えられるよう工夫した。

2) 成長発達各期の特徴と看護実践

1 年次後期

村川陽子

成長発達各期の発達課題、健康課題に応じた健康維持・増進のための看護実践について事例を用いて具体的に理解し、成長発達各期の健康課題と対策について学ぶことをねらいとしている。そのため、成長発達各期の特徴的な健康課題を提示し、健康の保持増進を図る看護の機能と役割および活動の場について理解が深められるよう教授した。具体的には、乳幼児期には、乳幼児突然死症候群や虐待、不慮の事故、感染症、喘息などのアレルギー疾患など、学童期から思春期にかけては、肥満やいじめ、不登校、摂食障害、喫煙・飲酒、性意識の変化と性の逸脱行動などへの関わりについて、事例やデータなど用いて考えられるよう工夫した。

3) 成育看護論Ⅱ（小児の健康と看護）

1 年次後期

村川陽子

子どもと家族をひとつの対象としてとらえ、乳幼児期から思春期までの成長発達の特徴について学び、子どもと家族の援助に必要な基礎的知識を理解することや、小児各期の発達段階に特有な健康上の課題および、基本的な生活習慣の確立に向けた援助方法を学ぶこ

とをねらいとしている。そのため、子どもの健全な成長発達の情報や健やかに成長発達する環境や生活を整えることの基本的な関わりについて教授した。具体的には、小児の概念や乳児期から思春期までの子どもと家族の日常生活の援助、子どもの権利擁護、小児看護の移り変わりなど教授した。また、健康な子どもや障害のある子どもに実際に関わる時間を持ち、既習学習と子どもの実際の統合ができるような演習を行った。学生は健康・不健康を問わず、子どもの成長発達を助長する関わりや状況に応じた関わりについて五感を通して感じとることの大切さや、よりよい環境や日常生活援助が重要であることを学んだ。

【母性看護学領域】

教育方針

成育看護論Ⅰ(母性看護学)では、女性のライフサイクル(乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期)およびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は成育看護論Ⅰ(母性看護学概論)、成育看護実践論Ⅰ(母性看護学各論)、成育看護学実習Ⅰ(母性看護学実習)で構成している。特に母性看護学実習Ⅰは妊娠期・分娩期・産褥期・育児期に重点を置いて実習を展開する。

科目の教育活動

1) 成育看護論Ⅰ

1 年次後期

宮崎文子、渡邊淳子、小嶋奈都子、早坂奈美

成育看護論Ⅰ(母性看護学概論)の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖(種族保存)の側面から、女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点を置き、母性各期における援助方法および母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとした。講義内容は、母性の概念、リプロダクティブヘルス/ライツの概念、セクシュアリティ(性の概念)、社会の変遷と母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計から見た動向、母性看護の対象となる人の理解、女性のライフサイクル各期の健康問題と看護、母子保健に関する関係法規、母性看護における倫理的課題(生命倫理)と対処法について教授した。本年度は初年度の講義であり、わかりやすい講義資料作成に努め授業展開を行った。講義終了後全体の授業評価等を行った。出席状況は良好であったが、できるだけ学生参加型の授業内容となるよう、来年度に向けて講義内容の精選に努めたい。

【精神看護学領域】

教育方針

精神・身体・知的の三障害の概念や特性を理解できるように、歴史的背景や障害に関する基礎的な知識、実際に行われている看護援助を示しながら、障害に対する理解を深められるようなカリキュラムを実施していく予定である。また、授業や実習を通して、自らの障害者観と向き合いながら、障害者の健康増進を考えられる力を身につけ、ノーマライゼーションの推進を支援できるようになることを目指している。そして、知識として習得することだけに留まるのではなく、障害者を取り巻く現状や課題について、自らの意見を持ち、積極的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

科目の教育活動

1) 障害者保健論

1年次後期

田中留伊、伊藤桂子、中村裕美

初学者であるため、できる限り難しい専門用語を用いず、障害について関心が持てるように心がけた。また、障害の概念や心の健康、障害者の歴史的背景が理解できるように、教科書やオリジナルのスライドを用いながら授業を行い、将来看護師として、障害や障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。さらに、実際に地域で生活している薬物依存症者の方をゲストスピーカーとしてお招きし、障害を抱えながら地域で生活することを考える機会とした。一方的な授業にならないように、授業内で学生が発言できる機会を設けたり、リアクションペーパーを書かせるなどの配慮を行った。

来年度は学生がより発言しやすい授業を行えるようにしていきたい。

3-3 科目の教育活動（研究科）

1) 診察・診断学特論（包括的健康アセスメント）

1年次前期

大島久二、磯部義憲、樺山幸彦、尾藤誠司、菊野隆明、松山友子、穴沢小百合、石川倫子

医療における診察、診断の意味を理解し、患者の状況に対応した診察、診断が行えるようにするための知識を得ることを目的に授業を構成した。具体的には、医療面接の方法、診断のための検査、血液データの分析、心電図や胸部・腹部のX線などの読影を臨床事例を用いて理解できる授業を行った。クリティカル領域のNPに必要な診察・診断の基盤となるフィジカルアセスメントに関する知識・技術の強化を意図し、集中講義（演習）20時間を追加した。これを踏まえ、次年度は「フィジカルアセスメント学演習」を設定する。

2) フィジカルアセスメント演習 (臨床推論と疾病病態)

1 年次前期

尾藤誠司、鄭 東孝、鈴木亮、安富大祐、森朋有、矢野尊啓、菊野隆明、松山友子、穴沢小百合

クリティカル領域で遭遇する症状に応じて臨床推論を行う過程を理解し、それを裏付けるためのフィジカルアセスメントを行い、症状に応じた的確な臨床推論ができるための知識・技術を身につけることを目的に授業を構成した。授業展開については、各専門医が臨床の事例を用いながら、どのように臨床推論するのかを中心に教授した。取り上げた症例は、発熱、腹痛、胸背部痛、外傷、意識障害、呼吸困難、浮腫、嘔吐、吐血、血糖値・電解質異常、貧血、めまい、ショック等のある患者である。また、各講師が臨床推論のカリキュラムの位置づけおよびNPの役割と活動について確認した上で講義をすすめた。今後は、クリティカル領域においてNPとして活動するためには、どのような症状を教育内容とするかを再検討することが課題である。

3) インフォームド・コンセント特論 (看護コンサルテーション論)

1 年次後期

清水洋子、古都昌子、大島久二、矢野尊啓、尾藤誠司、岩田敏

医療におけるインフォームド・コンセントの意義、クリティカル領域における患者の状況に対応したインフォームド・コンセントの技術、インフォームド・コンセントにおける高度実践看護師の役割、コンサルテーションの基本理論とインフォームド・コンセントとの関連について学習することをねらいとし、授業を展開した。具体的に、インフォームド・コンセントに実際に従事している多分野の専門家による講義と意見交換、インフォームド・コンセントの模擬演習、グループワーク、全体討議を導入しより実践に即した学習ができるよう工夫した。これにより、院生は授業に主体的に参加し、活動や学習上の課題を深めることにつながった。

今年度の教育評価、授業への感想意見等を踏まえ、次年度はクリティカル領域の学習を強化し、さらに学習目標が達成できるように科目構成、講義内容・方法を工夫し授業を展開することが課題である。

4) 医療安全特論

1 年次後期

草間朋子、石川倫子、加藤良一、岩田敏、鈴木義彦、大石崇、田沼明子

医療上の事故等(インシデント、アクシデント等を含む)は、日常的に起こる可能性があ

ることを認識し、事故を防止して患者の安全の確保を最優先することを理解する。特に実践の場において、医療事故を防止するために必要な看護師の能力は、医師の指示を批判的に思考する力、危険を回避するために医療行為の優先度を決定する力、患者に不利益な状況が生じている場合に対象に情報提供できる力、対象が受ける治療や処置に伴う有効性や危険性について理解できるように説明できる力である。このことが実践的に培えるように病院における感染事例、I V H挿入における事故事例を用いて、授業展開をした。さらに医療上の事故が発生した場合の医師の対処の仕方とその責任について学び、NPとしての自己の対処の仕方やその責任について考えた。

5) クリティカルケア特論 (クリティカルNP特論)

1年次前期

草間朋子、見藤隆子、エクランド源稚子、石川倫子、林茂樹、高里良男、小井土雄一、吉岡早戸、一二三亨、小笠原智子

クリティカル領域のNPの役割を理解し、クリティカル領域のNPが行う実践内容、主義に関する必要性とその判断方法について基礎的な知識を修得することを目的に授業を構成した。具体的な授業内容は、日本のNP養成教育の動向と制度化についての授業およびクリティカル領域における病態の理解についての授業などを行った。特にエクランド源稚子氏の「米国におけるNPの活動」の講義について、学生からはNPとしての活動がイメージできたなど好評であった。

今後の課題として、この科目についてはNPとしての役割を認識できるようにする授業内容のみとしていく必要がある。

6) チーム医療とスキルミクス

1年次後期

清水洋子、坂本祐子、小宇田智子、矢野尊啓、齋藤真一郎、神谷しげみ、眞隆一、濱也智子、福長暖奈

チーム医療、チーム医療におけるスキルミックスの理解を深め、チーム医療のあり方を探りながら、役割分担、協働のあり方を見つめ直し、これからのチーム医療を探求的に学ぶことをねらいとして授業を実施した。

具体的に、チーム医療を構成する各医療職の役割について理解を深めるため、多職種から情報提供、意見交換ができるよう各分野の講師の参画を得た。また、院生自らが経験したチーム医療の現状と対比しながら思考を深められるようグループワークや課題発表、全体討議を取り入れた。これにより、院生は自身の活動を振り返り、今後の新しいチーム医療のあり方、NPや特定看護師に期待される役割等について考え、言語化し、課題を明確

にすることにつながった。

次年度は講義時間が2単位から1単位となるが、今年度の授業評価や院生の意見・感想を踏まえ、学習効果の維持・向上が図れるよう授業計画・方法、外部講師の選定等を工夫し授業展開することが課題である。

7) 検査におけるスキルミックス実践 (スキルミックス実践Ⅰ)

1年次後期

宮崎文子、石川倫子、樺山幸彦、小林佳郎、吉川保、布施淳、門松賢

クリティカル領域で経験する患者の健康状態を判断できるように、クリティカル領域で特徴的な心血管、腎の問題に関する疾病病態、確定診断するために必要な検査、治療の実際について理解することを目的に授業を構成した。具体的な授業内容は、①心房細動・心房粗動の管理、②頻拍・房室ブロックの管理、③心不全の管理、④高血圧緊急症、⑤二次救命処置、⑥急性腎不全、⑦手術室およびICUにおける輸液療法、⑧アシドーシス患者への対応、⑨ナトリウム異常・カリウム異常などである。臨床経験のある学生たちの理解をより高めるために、臨床現場のリアリティな事象を用いて、授業展開した。

8) 診断におけるスキルミックス実践 (スキルミックス実践Ⅱ)

1年次後期

大石崇、島田敦、高橋正彦、尾藤誠司、森朋有、安富大輔、高橋正明、中村芳樹、小山田吉孝、中島由槻、松山友子、穴沢小百合

クリティカル領域で経験する患者の健康状態を判断できるように、クリティカル領域で特徴的な消化器、神経・精神、呼吸器、内分泌・代謝の問題に関する疾病病態、確定診断するために必要な検査、治療の実際について理解することを目的に授業を構成した。

具体的な授業内容は、1)消化器に関する問題：急性腹症、肝硬変患者の管理、虫垂炎と憩室炎、イレウス等、2)呼吸器に関する問題：喘息症状の管理、COPD 急性増悪、病態に応じた人工呼吸器の使用等、3)神経・精神に関する問題：不穏・錯乱状態・せん妄、脳梗塞急性期の管理、くも膜下出血・脳出血急性期の管理等である。大学院生は、多様な臨床経験を有しているため、臨床経験と学習内容を関連付けて理解を促進することを意図し、臨床事例を用いて授業を展開し学びを深めた。しかし大学院生の経験によっては学習内容の理解が困難な場合もあったため、さらなる教授方法の工夫や学習支援方法の検討も必要である。

9) 治療方法におけるスキルミックス実践 (スキルミックス実践Ⅲ)

1 年次後期

加藤良一、磯部陽、鄭東孝、尾藤誠司、小林佳郎、島田敦、南雲正士、石志紘 中村芳樹、吉川保、萬篤憲、矢野尊啓、草間朋子、石川倫子、伊藤桂子、坂本祐子

クリティカル領域で経験する患者の健康状態を包括的に判断し、必要な治療の判断とその実施ができるスキル修得のために、クリティカル領域で特徴的な高齢者、終末期、小児の問題、がん化学療法、血液に関する問題、周手術期の管理の実際について理解することを目的に授業を構成した。授業展開については、専門医が臨床現場での事例を用いながら、科学的根拠を明確にし、学生の授業内容に対する理解を高めた。しかし、多様な成長発達段階の患者、健康の段階、治療をすべて授業で取り上げることは困難であり、今後はさらにクリティカル領域においてNPとして活動するために、必要な教育内容の焦点化を図る。また学習者の既有知識と新学習内容との総合化を図る教授方法が課題として残った。

10) 診断におけるスキルミックス実践演習 (スキルミックス実践Ⅳ)

1 年次後期

岩田敏、松原啓太、保阪由美子、落合博子、大石崇、菊野隆明、森朋有、鄭東孝、中村芳樹、尾藤誠司、小山田吉孝、大島久二、安富大輔、高橋正明、布施淳、鈴木亮、宮崎文子、古都昌子、坂本祐子

クリティカル領域における臨床推論の知識を修得し、診断のための検査と診断・治療の実際を理解し、トリアージ、診断後の患者家族への支援が実践できることを目的として、オムニバスで講義をすすめた。

診察・診断の過程において臨床推論し、医学的な知識にもとづいて初期対応ができるように器官系統別に専門の医師によって講義・演習を展開した。診断に伴う技術は、適宜、シミュレーターを活用し、グループワークや演習形式で実践トレーニングを行った。診察後の患者および家族への支援では、事例を用いてロールプレイにより、患者・家族への実践過程を経験し、学習を深めた。多様な形式で展開される講義・演習において学内教員が学生の準備、学習教材を配備し、教育環境を整え、効果的に学習が進められるように配慮し、院生は学習動機を高め、取り組んでいた。

多くの医師によって展開される科目であり、推論過程、実践過程を確実に学び、技術習得につながるように科目内で体系的な学習を進めることが課題である。

1 1) 検査におけるスキルミックス実践演習 (スキルミックス実践V)

1 年次後期

磯部義憲、菊野隆明、戸矢和仁、栗屋典子、石川倫子

臨床のクリティカル領域で経験する特徴的な検査について、検査の必要性、病態と検査との関連を理解し、スキルミックスを展開して緊急時の検査技術を安全に確実に実践できるようにすることを目的に授業を構成した。具体的な授業内容は、シミュレータを用いた動脈採血の演習、東京医療センター放射線部門 (CT、MRI、血管造影室、PET等) における検査について、医師、診療放射線技師の実際を見学し、さらにCT等の読影を学習した。その学習効果を互いにプレゼンテーションし、疑問点を放射線科医師も交えて、ディスカッションを行った。その結果、学生の学びに対する満足は高かった。しかし腹部超音波検査については、医師のデモンストレーション後に学生同士で実施したが、超音波検査に関する基礎的知識の理解を事前に講義で行う必要性があり、次年度の課題として残った。

1 2) 治療方法におけるスキルミックス実践演習 (スキルミックス実践VI)

1 年次後期

加藤良一、磯部義憲、菊野隆明、安富大輔、高橋正明、鄭東孝、鈴木亮、島田敦、森朋有、落合博子、大石崇、中村芳樹、坂本奈美子、南雲正士、斎藤史郎、小山田吉孝、吉川保、田中伸、草間朋子、石川倫子、伊藤桂子、坂本祐子、

周術期患者、ハイリスク患者等に、包括的な健康状態の判断結果をもとに、必要な治療の選択とその実施において、経験する機会の多い事例の特徴的な治療方法についてエビデンスと患者の意思決定に基づいた治療方法の選択と治療していくプロセスを実践的に学ぶことを目的に授業内容を構成した。また実際にシミュレータを用いて、自己の役割・限界を明確にする授業方法を工夫した。

具体的には、シミュレータを用いて、以下の技術トレーニングを行った。

- ①ショックの事例における治療技術 (圧迫止血)
- ②呼吸管理の技術 (気管挿管)
- ③外傷時の治療 (縫合)
- ④褥瘡をもつ患者のデブリートメント
- ⑤栄養管理の技術 (超音波ガイド下の穿刺に限定した中心静脈ラインの確保)

さらに、治療を受ける患者への支援について、自分たちの臨床実践を通して経験した支援困難事例を用いて患者への支援について熟考した。そして1年間の学習を統合する演習として、「クリティカルな事例が変化を起こした時の患者の状況判断とその対応が実践できる」ことを目的に、テルモメディカルプラネックスで、シミュレーショントレーニングを

行った。その結果、自己の判断能力、調整能力等の限界を自覚し、さらにスキルミックスを高めていく必要性を認識でき、2年次の実習につなげることができた。

1 3) 研究の進め方

1 年次前期

草間朋子、宮崎文子、今井秀樹、石川倫子、小宇田智子

看護における研究の意義と特徴、研究デザインの考え方、研究の種類、研究方法（量的研究、質的研究、調査研究、文献的研究等）、統計の基礎、文献検索の仕方、倫理上の配慮等、研究を進める上で必要な知識への理解を深める。併せて、論文の書き方、効果的なプレゼンテーションの仕方、研究者としての手続きや態度について、できるだけ理解しやすいように参考例を挙げ教授した。今後は研究については初学者が多いため指導方法の工夫に努力したい。

1 4) 課題研究

1 年次通年

宮崎文子、草間朋子、今井秀樹、田中留伊、その他全ての教員

臨床現場で遭遇した疑問あるいは問題を科学的に解決する能力を養うために、前期より開講している。具体的には、数回のグループワークを行った後、学生自らが希望する教員グループより指導を受け、実際に科学的な根拠に基づく知識がどのようなプロセスで獲得されるか学習している。今年度は、課題研究のテーマと内容について集中的に指導を行い、中間発表会を行った。

1 5) 原著論文講読

1 年次通年

今井秀樹、清水洋子、田中留伊、渡邊淳子、伊藤桂子、佐藤潤、小宇田智子、小嶋奈津子

国際誌に掲載された英語の原著論文を題材にして抄読会形式で発表させた。発表の際にはレジメを1枚作成させたが、このレジメは単に論文の日本語訳とすることなく、要点をもれなく簡潔にまとめ、かつ論文の背景も含めた内容を記載するように指導した。英語の論文を読むことが、あるいは日本語を含めた原著論文を読むことが初めてである学生もいたため、当初はかなり稚拙な発表になりがちであったが回が進むにつれて個人的に差はあるものの目に見えて向上が明らかとなった。最終回の発表では New England Journal of Medicine のような高い IF の雑誌から論文を選択する学生もあった。

論文の選択範囲は看護学に限らず、広く医学・生物学にも含めるよう指導したが来年度もこの方針を踏襲し、より広い視野を持った研究者を養成することを抱負としたい。

1 6) 学習援助論 (看護教育特論)

1 年次後期

宮崎文子、石川倫子

看護の人材育成が質の高い看護の基礎をなすという観点から、教育的機能の基本を理解し、看護教育の歴史的変遷と看護教育制度、今後の看護教育の課題について考えた。また NP としての役割を果たすために、必要な教育原理と教育方法を学び、専門職者としての自己教育力、生涯教育力を具えた人材育成を学ぶことを目的に授業を構成した。1) 看護教育における教育的機能、2) 看護教育の歴史的変遷と看護教育制度、3) 今後の看護教育の課題、4) 成人及び専門職における「教育・学習」の考え方等を講義後、学生が自らが抱える教育課題を解決するために、グループワークをし、発表を行い、全員でディスカッションした。しかし具体的な解決策に至らなかった。今後は学生が課題の要因を具体的に掘り下げられるように支援をしていきたい。

1 7) 保健医療福祉システム特論

1 年次後期

草間朋子、川井充、金子あけみ、佐藤潤

少子高齢化が急速に進展する中、保健医療分野においては知識・技術の高度化と専門分化が進んでいる。福祉分野においても福祉ニーズの増大、多様化が顕著であり、このような社会の要請に応え得る高度な専門性が求められている。

このため、本講では、まず、保健医療福祉に係る主な制度及び政策決定プロセス等に関する知識、健康政策の意義と課題について学ぶこととした。また、少グループでの演習を行い、履修生には自ら選らんだ政策上のテーマについて、文献等を用いて調査発表してもらい、政策への関心を高め、新たな保健医療福祉システム構築に資する知見と考え方を学べる機会とした。

本年度の演習では、さまざまなテーマについて自由に討論でき、学習成果もあったことから、来年度においてもさらに充実させていきたいと考えている。

18) 政策医療特論

1年次前期

松山友子、松本純夫、山西文子、見籐隆子、古都昌子

政策医療や看護政策に関する理解を深めることを目的に、1)日本の医療と政策医療の現状の理解、2)政策にと看護に関する理解、3)政策的視点からみた医療・看護に関する問題への取り組み、を柱に授業を構成した。1)については、日本の医療の歴史の変遷を踏まえ、現代の医療ニーズや医療における課題について、政策医療に関わる専門分野の講師（ゲストスピーカー）による講義と問題提起を受けて検討した。2)については、講義を通し政策医療に関する看護師の役割と課題を理解するとともに、看護制度の変遷を踏まえて看護政策に関する理解を深めた。3)についてはグループ及び全体討議とした。現在の医療や看護について大学院生の関心の高い問題をグループで取り上げ、その問題に関する政策的な取り組みの変遷を踏まえて分析し、解決に向けた方策や看護職の課題について検討した。大学院生からはこれまで政策的な視点については関心が低かったが、授業を通し関心が高まっただけでなく、その重要性を理解したという反応が多くあった。しかし、討議に至るまでの基本的な知識が不十分な面もあったため、必読文献の再検討が次年度の課題である。

19) 専門職と看護倫理

1年次前期

宮崎文子、古都昌子、矢野尊啓

講義は、看護専門職としての倫理の原則、意思決定のための判断基準について学び、院生の経験をふまえて分析的に思考し、倫理的感受性を高めることを目的とした。

すすめ方は、専門職とは何か、看護倫理に関する基礎的な知識、重要な言葉を講義し、チーム医療と役割拡大における倫理的葛藤が生じるプロセス、倫理的意思決定のステップなどについて臨床で遭遇しうる倫理的問題を抽出しながら、事例検討をすすめた。チーム医療と役割拡大における医療行為と看護行為について医師、看護師などそれぞれの立場から倫理的葛藤事例をもとに意見交換し、幅広い考え方に気付けるような教育方法とした。

倫理的意思決定のステップについて院生の臨床での経験もふまえて、事例を用いてグループワーク、発表、全体討議にて検討を深めた。グループワークではディベート法などの討議法も取り入れて価値葛藤が生じる事例について、多様な倫理的判断について学習を深めることができた。

次年度は、今年度の講義、グループワークの進め方への意見などをふまえて、さらに効果的な事例検討、グループワークが進められるように工夫したい。

4、業績

【看護基盤学領域】

1. 学会発表

1) 衣川さえ子, 金子あけみ, 石川倫子, 梅津靖江. 受講生からみた「看護教員養成講習会」における教育目標の達成度と学習ニーズ, 第30回日本看護科学学会学術集会, 2010年12月3日~4日, 札幌市.

2) 小宇田智子, 今井秀樹. Protective effects of flavonoids against toxicant-induced memory dysfunction and hippocampal injury in rats, 第1回東北大学脳科学国際シンポジウム2011, 2011年1月21日~23日, 仙台市.

2. 研究助成および研究成果報告書

1) 今井秀樹. 海馬機能障害に対する食品由来栄養素の保護作用に関する研究. 日本学術振興会科学研究費補助金. 2008年度~2010年度.

2) 衣川さえ子, 島田千恵子, 金子あけみ, 渡邊淳子, 石川倫子, 倉田貴子, 古村ゆかり, 菱谷純子, 梅津靖江, 安彦忠彦. 看護基礎教育の充実および看護職員卒後研修の制度化に向けた研究, 厚生労働科学研究費補助金事業, 2009年度.

3) 小宇田智子. 記憶障害に対するルチンの保護的役割とその作用機序の解明. 日本学術振興会科学研究費補助金. 2009年度~2010年度.

4) 黒川清, 米野琢哉, 柴垣有吾, 津村和大, 福原俊一, 平塚義宗, 柳川堯, 吉田裕明, 我妻ゆき子, 金子あけみ. 戦略研究の基盤整備に関する研究, 厚生労働科学研究特別研究事業, 2010年度.

3. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

今井秀樹

1) 長崎大学医学部非常勤講師

2) 環境省化学物質の内分泌かく乱作用に関連する報告の信頼性評価作業班班員

3) 独立行政法人国立環境研究所共同研究員

金子あけみ

1) 厚生労働省 戦略研究企画・調査専門検討会委員

2) 青森県立保健大学非常勤講師 (保健福祉政策学特論)

小宇田智子

1) 厚生労働省「職場の化学物質のリスク評価推進事業」の有害性評価書原案作成グループ委員

2) 独立行政法人国立環境研究所共同研究員

【基礎看護学領域】

1. 学会発表

- 1) 高橋智子, 田代公美, 松山友子. 一次的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討～ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して～ 報告 1: ストーマの捉え方に関する経験について, 第 41 回日本看護学会学術集会 成人看護 I, 2010 年 10 月 6 日～7 日, 別府.
- 2) 田代公美, 高橋智子, 松山友子. 一次的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討～ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して～ 報告 2: 生活に関する経験について, 第 41 回日本看護学会学術集会 成人看護 I, 2010 年 10 月 6 日～7 日, 別府.
- 3) 吉満祥子, 勝野とわこ. 認知症高齢者に対する Individualized Music Intervention for Agitation の効果, 第 30 回日本看護科学学会学術集会, 2010 年 12 月 3 日～4 日, 札幌.

2. 研究助成および研究成果報告書

- 1) 本田多美枝, 濱田悦子, 佐々木幾美, 唐澤由美子, 福田美和子, 松山友子, 石塚敏子. 看護における反省的モデルの構築. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B). 2010 年度～2012 年度.
- 2) 佐々木幾美, 濱田悦子, 本田多美枝, 唐澤由美子, 福田美和子, 松山友子, 朝倉京子. 看護者のリフレクション能力を開発するためのプログラム構築に関する基礎的研究. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B). 2010 年度～2012 年度.

3. 社会貢献

穴沢小百合

- 1) 国際看護活動論. 国際医療福祉大学非常勤講師. 2010 年 9 月 20 日～2011 年 3 月 31 日.
- 2) 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 看護研究指導. 2010 年 11 月～2011 年 3 月

松山友子

- 1) 専門コース: 看護過程. 独立行政法人国立病院機構 東京医療センター 看護部研修会. 2010 年 9 月 10 日

【成人・老年看護学領域】

1. 著書

1) 坂本祐子(分担執筆)(2010). 人体の構造からみた病態生理ビジュアルマップ医学書院, 東京

2. 論文等

1) 石川倫子 (2011). 中堅看護師における急性期意識障害患者への看護ケアの意味. 看護実践学会誌, 23(1), 11-20.

2) 石川倫子 (2011). 「専任教員養成講習会及び教務主任養成講習会ガイドライン」解説—教育課程に焦点を当てて—, 看護教育, 52(2), 100-107 頁

3. 学会発表

1) 石川倫子, 看護教員養成における「授業観察」演習の効果, 日本看護学教育学会第 20 回学術集会, 2010 年 7 月 31 日~8 月 1 日, 大阪.

2) 石川倫子, 岩澤和子, 倉田貴子, 熟練看護教員からみた看護教員養成カリキュラムの改善点と期待, 第 30 回日本看護科学学会学術集会, 2010 年 12 月 3~4 日, 札幌.

3) 石川倫子, クリティカル領域の特定看護師(仮称)の活動に伴うアウトカム評価に関する調査の進め方, 第 30 回日本看護科学学会学術集会, 2010 年 12 月 3~4 日, 札幌.

4) 古都昌子, 東が丘看護学部の教育の方向性と機構施設との連携, 第 64 回国立病院総合医学会, 2010 年 11 月 26 日~27 日, 福岡

4. 研究助成および研究成果報告書

1) 衣川さえ子, 島田千恵子, 金子あけみ, 渡邊淳子, 石川倫子, 倉田貴子, 古村ゆかり, 菱谷純子, 梅津靖江, 安彦忠彦. 看護基礎教育の充実および看護職員卒後研修の制度化に向けた研究, 厚生労働科学研究費補助金事業 (H21-医療-指定-010) 報告書, 2009 年度

5. その他

1) 石川倫子(2010). 評価から始める教育活動: 看護教員養成における教育プログラムの改善、看護教育, 51(5), 418-421 頁.

2) 石川倫子 (2011). 特集「これからの看護教員養成」座談会「看護教員養成ガイドライン活用と発展」, 看護教育, 52(2), 90-98 頁.

6. 社会貢献

石川倫子

1) 静岡県看護師養成機関連絡協議会講演会 講師, 2010 年 6 月 16 日 講演テーマ「看護教員に求められる能力とその教育方法」

2) 厚生労働省第 4 回チーム医療推進のための看護業務検討ワーキングにおける特定看護

師(仮称)養成調査試行事業 参考人, 2010年10月6日 ヒヤリング「クリティカル領域における特定看護師(仮称)育成のためのカリキュラム」

3) 国立病院機構 横浜医療センターでの看護研究指導 講師

【母性看護学領域】

1. 著書

1) 助産師資格試験研究会(斉藤益子, 宮崎文子他21名)編(2010). 助産師国家試験予想問題2011(第2版). クオリティケア, 東京.

2. 論文等(原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

1) 宮崎文子(2010). ウズベキスタンで看護教育を変える: カリキュラムの実際ー母性看護ー. 看護教育, Vol. 51(4), 340-347.

2) 宮崎文子, 大沢豊子, 檜原洋子(2010). ドイツの助産師教育ーバイエルン州立助産師専門学校のカリキュラムー. 助産雑誌, Vol. 64(4), 362-369.

3) 檜原洋子, 斉藤益子, 宮崎文子(2010). ドイツにおける助産学実習. 助産雑誌, Vol. 64(5), 454-459.

4) 宮崎文子(2010). アメリカのナースプラクティショナーの現状と活動の実際. 日本母子看護学会誌, Vol. 4(2), 1-6.

5) 渡邊淳子, 恵美須文枝(2010). 熟練助産師の分娩期における判断の手がかり. 日本助産学会誌, Vol. 24(1), 53-64.

6) 渡邊淳子, 恵美須文枝, 勝野とわ子(2010). 熟練助産師の分娩1期におけるケアの特徴. 日本保健科学学会誌, Vol. 13(1), 6-15.

7) 渡邊淳子(2010). 助産所での分娩介助実習における学び. 日本ウーマンズヘルス学会誌, Vol. 9(1), 59-66.

8) 渡邊淳子(2010). 熟練看護職に関する文献から考える助産学における熟練の検討. 日本母子看護学会誌, Vol. 4(2), 31-41.

3. 学会発表

1) 衣川さえ子, 石川倫子, 古村ゆかり, 渡邊淳子, 島田千恵子, 平賀元美, 高口みさき, 看護教員養成カリキュラムにおける教育目標の到達度に対する受講生の認識, 第20回日本看護学教育学会学術集会, 2010年7月31日8月1日, 大阪市.

2) 西村民子, 渡邊淳子, 新人看護師の看護実践における経験の意味づけ, 第20回日本看護学教育学会学術集会, 2010年7月31日8月1日, 大阪市.

3) 古村ゆかり, 渡邊淳子, 菱谷純子, 倉田貴子, 「看護教員養成講習会」の実態調査 - 第1報: 専任の教育担当者からみた「看護教員養成講習会の課題」 -, 第30回日本看護科学学会学術集会, 2010年12月3日4日, 札幌市.

4) 菱谷純子, 倉田貴子, 渡邊淳子, 古村ゆかり, 「看護教員養成講習会」の実態調査 - 第2報:シラバス分析からみた教育内容の実態 -, 第30回日本看護科学学会学術集会, 2010年12月3日4日, 札幌市.

4. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

宮崎文子

- 1) 大分県看護協会副会長 (2010年6月まで)
- 2) 日本母子看護学会理事
- 3) 日本助産学会代議員
- 4) 日本看護科学学会学術集会査読委員
- 5) 日本助産学会学術集会査読委員
- 6) 大分県看護協会助産師職能集会研修会講師: スウェーデンの助産師活動と性教育
- 7) 大分県立看護科学大学非常勤講師 (大学院)
- 8) 大分県立看護科学大学特任教授 (学部)

渡邊淳子

- 1) 厚生労働省関東甲信越厚生局実習指導者講習会講師
- 2) 富山大学看護学会誌査読委員
- 3) 一般社団法人日本看護研究学会査読委員
- 4) 第4回日本母子看護学会学術集会準備委員
- 5) 世田谷区立弦巻中学校2年生 性教育
- 6) 星槎学園高等部 障害を持つ高校生を対象とした性教育
- 7) 大田区立開桜小学校5年生 性教育
- 8) 大田区立開桜小学校6年生 性教育

5. 研究助成および研究成果報告書

1) 衣川さえ子, 島田千恵子, 金子あけみ, 渡邊淳子, 石川倫子, 倉田貴子, 古村ゆかり, 菱谷純子, 梅津靖江, 安彦忠彦. 看護基礎教育の充実および看護職員卒後研修の制度化に向けた研究, 厚生労働科学研究費補助金事業 (H21-医療-指定-010) 報告書, 2009年度

【精神看護学領域】

1. 著書

1) 田中留伊 (2010). 初診料. 再診料. 調剤料. 紹介状. 入院基本料. 特定入院料. リハビリテーション料. 野中猛監修. 看護に必要な精神保健制度ガイド (2). 36-47, 中山書店, 東京.

2. 学会発表

1) 細谷和夫, 石崎有希, 小出浩史, 笠原智樹, 小林佳恵子, 若林幸久, 三枝晶子, 山本

欣司, 田中留伊, 精神科における包括的暴力防止プログラム研修導入の試み, 第 65 回国立病院総合医学会, 2010 年 10 月 8 日, 岡山.

2) 石崎有希, 須藤淳, 山田洋, 田中留伊, 森千鶴, 医療観察法における統合失調症への疾患教育プログラムの検討, 第 36 回日本看護研究学会学術集会, 2010 年 8 月 22 日, 岡山.

3) 板山稔, 田中留伊, 医療観察法に勤務する看護師の自律性、ストレス、バーンアウトの関連, 日本精神保健看護学会第 20 回学術集会, 2010 年 6 月 19 日 20 日, 東京.

4) 板山稔, 田中留伊, 医療観察法に勤務する看護師の自律性、ストレス、バーンアウトに関する研究, 第 36 回日本看護研究学会学術集会, 2010 年 8 月 22 日, 岡山.

5) 伊藤桂子, DV・性犯罪加害者における地域支援のあり方について, 第三回日本地域連携精神看護学研究会, 2010 年 12 月 23 日, 東京.

6) 中村裕美, 森千鶴, 中学生の摂食障害傾向とボディイメージの歪みとの関連, 第 36 回日本看護研究学会学術集会, 2010 年 8 月 22 日, 岡山.

7) 田中留伊, 板山稔, 薬物関連精神疾患治療病棟に勤務する看護師の自律性に関する研究, 第 36 回日本看護研究学会学術集会, 2010 年 8 月 22 日, 岡山.

3. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

田中留伊

1) 教育機関による取り締まり機関と連携した薬物乱用対策, 第二回薬物乱用対策研修会, 国立病院機構下総精神医療センター

2) 教育現場の現状～今、何をすべきか～, 平成 22 年度思春期従事者研修, 滋賀県立精神保健福祉センター

3) 第 10 回日本アディクション看護学会学術集会実行委員

4) 第 41 回日本看護協会論文集看護教育査読委員

5) 国立病院機構下総精神医療センター看護研究指導

6) 小澤高等看護学院非常勤講師

伊藤桂子

1) 第 10 回日本アディクション看護学会学術集会実行委員

【地域看護学領域】

1. 著書

1) 清水洋子(共著) (2010). 保健師国家試験問題解説 (MEDIC MEDIA)クエッション・バンク 2011. メデックメディア, 東京.

2. 論文等 (原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料)

1) 荒木田美香子, 佐藤潤, 臺有桂, 山下留理子, 青柳美樹, 津島ひろ江. 幼児を持つ母親の幼稚園および保育所の選択条件に関する調査. 小児保健研究, 69 (4), 525-533.

3. 学会発表

- 1) 荒木田美香子, 和田耕治, 山下留理子, 青柳美樹, 佐藤潤. 日本語版 presenteeism の標準化の試み. 第 69 回日本公衆衛生学会, 2010 年 10 月 28 日, 東京.
- 2) 森田理江, 荒木田美香子, 佐藤潤, 山下留理子, 青柳美樹, 伊藤範子, 中元健吾, 鈴木志津江, 浜辺郁子, 巽あさみ. メタボリックシンドロームを対象とした継続的な保健指導における効果の検討, 第 83 回日本産業衛生学会, 2010 年 5 月 28 日, 福井.
- 3) 大北啓子, 清水洋子. 6 か月未満の要支援乳児と母へのグループ支援 (親育ちプログラム: IPP0) グループワーク展開の検討, 第 16 回子ども虐待防止学会, 2010 年 11 月 27 日, 熊本.
- 4) 大澤康, 清水洋子. 介護予防のための温水健康体操教室参加者の継続参加に関わる要素, 第 69 回日本公衆衛生学会, 2010 年 10 月 28 日, 東京.
- 5) 佐藤潤, 牧栄理, 加藤理枝子, 清水洋子. 特定保健指導プログラムにおける属性による選好の違い, 第 69 回日本公衆衛生学会, 2010 年 10 月 27 日, 東京.
- 6) 清水洋子, 柴田健雄, 佐藤潤. 介護予防事業「温水健康体操教室」参加者の主観的効果と参加継続期間との関連, 第 69 回日本公衆衛生学会, 2010 年 10 月 28 日, 東京.
- 7) 清水洋子, 平賀千夏, 國松明美. 介護予防を目指した温水体操教室の効果—参加者と教室アシスタントの主観的観点から, 第 19 回日本健康教育学会, 2010 年 6 月 20 日, 京都.
- 8) 清水洋子, 柴田健雄. 虐待予防を目指したグループ・ミーティング支援に求められる能力—保健師の支援能力の構造化と能力重要度, 第 12 回日本地域看護学会, 2010 年 7 月 10 日, 札幌.
- 9) 清水洋子. 6 ヶ月児未満要支援児と母親を対象としたグループ子育て支援—母親の子育て意識の観点から捉えた支援効果, 第 30 回日本看護科学学会, 2010 年 12 月 3 日, 札幌.

4. 研究助成および研究成果報告書

- 1) 佐藤潤. コンジョイント分析を用いた特定保健指導におけるデマンド調査票の開発に関する研究 (研究代表者). 文部科学省科学研究費補助金若手研究 (B). 2009 年度~2010 年度.
- 2) 佐藤潤. 職域における生活習慣病予防のためのハイリスク・ポピュレーションアプローチの連動に関する研究 (研究代表者). 厚生労働省科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業). 2010 年度~2011 年度.
- 3) 清水洋子. 子ども虐待予防の評価に基づくグループ・ミーティング支援の効果的展開と支援能力に関する研究 (研究代表者). 文部科学省科学研究費補助金基盤 (C). 2009 年度~2012 年度.

5. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師）

清水洋子

- 1) NPO 日本健康教育士養成機構 理事
- 2) 日本健康教育学会 評議委員
- 3) 日本地域看護学会 学会誌査読委員
- 4) 日本ケアマネジメント学会 評議委員および編集委員
- 5) 日本在宅ケア学会 学会誌査読委員
- 6) 日本健康教育士養成研修会 講師
- 7) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン推進委員会委員
- 8) 埼玉県上尾市健康増進計画推進委員会オブザーバー
- 9) 三喜会鶴巻訪問看護ステーショングループ 記録改善委員会委員
- 10) 愛知県一宮市「子ども虐待予防支援のための子育て支援事例検討会」講師
- 11) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン“こころの健康づくり推進プロジェクト”「こころが元気になる講座（計7回）」シンポジスト, 講師
- 12) 新潟県湯沢町 平成22年度第5回地域ケア会議助言者
- 13) 愛知県一宮市 子育て支援グループ検討会助言者, 保健師現任教育研修会講師

松沼瑠美子

- 1) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン“こころの健康づくり推進プロジェクト”「こころが元気になる講座（計7回）」講師
- 2) 新潟県湯沢町平成22年度ゲートキーパー研修講師
- 3) 埼玉県看護協会研修講師
- 4) 群馬県看護協会研修講師
- 5) 福島県看護協会研修講師
- 6) 山形県看護協会研修講師
- 7) イマインターネット教育, 看護スキルアップ講座/看護ケア講座講師

加藤理枝子

- 1) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン“こころの健康づくり推進プロジェクト”「こころが元気になる講座」講師

牧栄理

- 1) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン“こころの健康づくり推進プロジェクト”「こころが元気になる講座」講師

5、 教職員名簿

専任教員	担当領域	氏名	職名	採用等年次
	看護基盤学領域	今井 秀樹	教授	22. 4. 1 採用
		金子 あけみ	准教授	22. 4. 1 採用
		小宇田 智子	講師	22. 4. 1 採用
	基礎看護学領域	栗屋 典子	教授	22. 4. 1 採用
		松山 友子	教授	22. 4. 1 採用
		穴沢 小百合	准教授	22. 4. 1 採用
		吉満 祥子	講師	22. 10. 1 採用
		高野 律子	助手	22. 4. 1 採用
		竹前 良美	助手	22. 4. 1 採用
	成人・老年看護学領域	石川 倫子	准教授	22. 4. 1 採用
		古都 昌子	准教授	22. 4. 1 採用
		坂本 祐子	講師	22. 4. 1 採用
		今井 真喜	助手	22. 4. 1 採用
		雛田 雅代	助手	22. 4. 1 採用
	小児看護学領域	村川 陽子	講師	22. 4. 1 採用
	母性看護学領域	宮崎 文子	教授	22. 4. 1 採用
		渡邊 淳子	講師	22. 4. 1 採用
		小嶋 奈都子	助教	22. 4. 1 採用
		早坂 奈美	助手	22. 4. 1 採用
	精神看護学領域	田中 留伊	准教授	22. 4. 1 採用
		伊藤 桂子	講師	22. 4. 1 採用
		中村 裕美	助教	22. 4. 1 採用
	地域看護学領域	清水 洋子	教授	22. 4. 1 採用
		佐藤 潤	講師	22. 4. 1 採用
		松沼 瑠美子	講師	22. 4. 1 採用
		加藤 理枝子	助手	22. 4. 1 採用
		牧 栄理	助手	22. 4. 1 採用
	看護学研究科	見藤 隆子	教授	22. 4. 1 採用

事務職員

役職	氏名
部長	木原 英三
係長	上原 朝美
職員	早坂 晴美
職員	齋藤 容子
職員	下田 織恵
図書館司書	飯嶋 正敏
図書館司書	官澤公美子
保健師・相談室担当	原田 直美